

『チャタレー夫人の戀人』について

井上義夫

一九二六年十月から二八年初頭に至る一年餘りの間に、D・H・ローレンスは『チャタレー夫人の戀人』を三度改稿してゐる。三作を通じて、不具の夫を持つ貴族の婦人がその所領地の獵番と交りを結ぶといふ筋に變りはない。しかしそれ以外の點については殆ど原形をとどめぬまでに改作されてゐるから、作者は同様のテーマで三冊の本を書いたと云へば一層簡明である。即ち、『チャタレー夫人の戀人初稿』(The First Lady Chatterley)、『ジョン・トマスとレイディ・ジェイン』(John Thomas and Lady Jane)、『チャタレー夫人の戀人』(Lady Chatterley's Lover)がそれである。最終稿は、一九二八年六月にフィレンツェで私家版として出版された。第一、第二草稿が出版されたのは、ローレンスの没後、それぞれ一九四四年、一九七三年のことである。さらに、死去の前年に當る一九二九年には、作者は自ら『チャタレー夫人の戀人について』(Apropos of Lady Chatterley's Lover)と題する長文のエッセイを認め、問題の書に係る作者の信念を披瀝しつつ、作中人物にも言ひ及んでゐる。それ故『チャタレー夫人の戀人』を語ることは、やがて屋上屋を架するの觀を免れぬ事であるかも知れない。作者が懇切丁寧に同書の「思想」を開陳した以上、批評家は寧ろ寡黙を守らねばならぬと云ふのは、これはまた一つの見識ではある。事實ローレンスに關する限り、批

評家の手になる「批評」が、この作家がエッセイ等で述べた事柄の反復にすぎぬ場合が多く、その結果、「生命」「宇宙意識」「男根的優しさ」といふ類の言葉が犯濫する中で、眞摯なる批評家とローレンスが相共に演ずる無惨なる笑劇を私らは餘りにも屢々目撃しすぎた嫌がある。ローレンスその人がかかる不幸の端緒をつけた人であつたことは、他ならぬローレンス自身の自覺したことでもあつたから、後の人々は言葉を控へる方が賢明であつたとも云ひ得る。のみならず、作者が『チャタレー夫人の戀人』を三度に互つて改稿した事實は、同書に對する作者の尋常ならざる執着を窺せ、それはまた同書を語る言葉を不要のものとするかの如くである。事實この改作の過程は、贅を削り缺るを補つてその内容を鮮明化する過程に他ならず、『チャタレー夫人の戀人について』に至つては、この作家には珍しく自作の解説が要領を得て、秋毫も曖昧さを残してゐないと云つても過言ではない。

しかしここに、鮮明になればなる程誤解を生じやすい小説もまた存在するのである。『チャタレー夫人の戀人』はそのやうな不幸な小説の一具體例であつたと筆者は考へる。不幸である所以は、誤解はローレンスも好んでこれを求める處ではなかつたからであり、同書は當然にも、批評家の當惑と一般の人々の敵意を徒らに倍加したからである。本稿は、ローレンスが『チャタレー夫人の戀人』によつて爲し得た事と爲し得なかつた事の雙方を、その草稿を手懸にしつゝ検討しようとするものである。即ちその成果を、作者がおそらく成果と誤認したものから分たうと試みるものである。更には、作者が本當は何を爲たかつたかについて、當人に代つて一考を加へようとするものである。さういふ試みの妥當性については疑念を抱きつゝも、猶その必要を痛感するのは、おそらくは作者にとつても失敗作であつたこの小説が、その代表作の一つに數へられる傾向に對して、一抹の危懼を抱かざるを得ないためである。

(一)

『チャタレー夫人の戀人』が「性」を扱つた小説であることは、さしあたつては明白なことである。しかし作者にとつて「性」が如何なるものであり、それがどのやうに表現されたかといふ點については、批評家の見解は大きく別れる。その端的な例は、所謂「性描寫」をめぐる見解の相違に見られるが、この相違は小説全體の評價をさへ左右するやうに思へる。いまこの小説を「汚ダマならクしい」と看做す論者はまづ論外とするとしても、ローレンスに好意的な批評家の場合にさへ、今少し隱當に書かれてゐればといふ思ひは、それとして明言されずとも常に心の底に蟠つてゐるやうである。例へばF・R・リーヴィスが次のやうな文章を認めたとき、彼の念頭を占めてゐたものは、所謂「四文字語」(four-letter words)の作中頻々たる使用であつたと推測できる。

『處女とジブシー』の成し遂げた成果は、『チャタレー夫人の戀人』に較れば無條件に喜べる成果である。比較の要點はおそらく明瞭であらう。後者は無論、卑猥な單語とそれに對應する肉體的事實に對し衛生學的に取組んだ爲に悪名高い小説である。しかしその本質的意圖が首尾よく効を奏する爲には、『處女とジブシー』の成果に頼らねばならないのである。即ち慾望といふ事實とその事實のもつ重大な意味を、明瞭かつ偏見のない承認を得て尊ばれるやうな形で示した、といふ成果に頼らねばならない。衛生學的取組みが洗練に對する罪を犯したことについては、達成された結果によつてその罪は正當化されるかも知れぬが、それがやはり罪科であることに變りはないし、今後もさうでなければならぬと私は考へるのである。『處女とジブシー』には然し、このやうな非難は當らぬことである。

リーヴィスの指摘は、『チャタレー夫人の戀人』がローレンスの小説の長所である柔軟フレキシビリティ性を缺き、過度なまでに

意圖された不自然さを持つといふ難點にも及んでゐる。このことについては後述するとして、『小説家、D・H・ローレンス』の中で、リーヴィスは『チャタレー夫人の戀人』を正面から論じる必要性もその意欲も感じなかつたと見え、『ジプシーと處女』を取上げることによつてこれに代替させ、同じ作家の手になる『チャタレー夫人の戀人』についてを激賞して、結果的には『チャタレー夫人の戀人』を黙殺することになつた。

なるほど『チャタレー夫人の戀人』は、ローレンスのエッセイの白眉とも稱すべき書である。この書は私等の時代の「愛」と「性」と「生」全般に關する診斷と臨床の書であるから、これを熟讀すれば現代人の精神の病相は概ね了解できる筈である。例へば、「一度愛し合つた者が相互に抱く烈しい憎惡ほど、我々の時代に於て絶望的スルカリンなものもない」と述べた後に、

今日全ての愛は紛ひ物である。規格品である。戀する若者は全て、どういふ風に感じどう振舞ふべきかを知悉してをり、彼等はその通りに感じその通りに振舞ふ。これは紛ひ物の愛である。やがて反動が幾十倍にもなつて戻つて来る。性、即ち男女の性的な有機的組織體は、紛ひ物の愛を幾度か巧妙に擱まされた後で、(たとへ性は性で他ならぬ紛ひ物の愛をしか與へなかつたにせよ)絶望的で救ひ難い怒りを蓄積する。愛に於るこの偽瞞は、最後には究極のところでは一人一人の性を狂はせる、さもなくば殺戮する。⁽²⁾

と書かれた箇所などは、著者の鋭い洞察力を窺せるに足る部分である。しかし他方、以下の如き文章に接するときには私等是不審の念に襲はれざるを得ないのである。

……事實は、思考と行爲、言葉と行動は意識の二つの離れ離れの形態、我々の過す二つの異つた生活になつて了つた。我々は眞實、兩者の間に繋りを保持しなければならない。しかるに我々が考へるとき我々は行動せず、行動するときには考へることがない。この上もなく必要なことは、思考に従つて行爲し、行爲に従つて考へることである。……思考と行爲といふ二つの状態は互ひに排斥し合つてゐる。それらは然し調和的に關係づけられねばならぬのである。

そしてこのことが、同書の(『チャタレー夫人の戀人』の——引用者)眞の要點である。私は人々が性を十分に、完全に、眞正直に、偏見なしに考へるやうになつて貰ひたいのである。⁽³⁾

「性」の事實とその認識との間の乖離を正す目的で、ローレンスは「性」に關する啓蒙の書を認めた、と讀むしかない文章である。性に被せられた隠微なる覆を除き、「性」を在るが儘に知る爲に「四文字語」が用ゐられたと言はればかりであり、——事實引用箇所の二頁程あとには、スウィフトの詩から “But——Celia, Celia, Celia s***s” (the word rhymes with spits) なる詩句が引かれる——同様の主張は、同じ時期に書かれた「猥褻とホルノグラフィ」にも見えるのである。しかし假に『チャタレー夫人の戀人』がそのやうな主旨の小説であるとすれば、ほぼ同時期に草された『死んだ男』(The Man who Died) に現れる古代の幻の如き「性」はどう説明されるべきであるか。そこでは當然ながら、「性」はただ朗らかにして明瞭なものではない。むしろ、實現されぬ人間關係に對する絶望が生む烈しい夢の如きものである。

自作を解説した『チャタレー夫人の戀人について』には、無意識によつて捉へたものを意識化するときローレンスは誤りを犯した、と T・S・エリオットが指摘した誤りが含まれてゐるやうに思へる。それ故私達はまづ、小説の展

開に即して性がどう描かれ、「四文字語」がどう用ゐられてゐるかを検討しなければならない。この作家にとつて「性」がどのやうなものであり、『チャタレー夫人の戀人』の「要點」が作者自身の語るところとどのやうに異なるかは、その後に明らかになる筈である。

『チャタレー夫人の戀人』は、その本質に於て現實社會との間に係りを持たぬ小説である。にも拘らず、一讀して明らかなる如く作者は他の作品に類を見ぬほど「現代」といふ時代とイギリスといふ國を意識しつゝこの書を書き起してゐる。第一章の、コンスタンスとクリフォードの來歴を述べる部分に至つては、恰も社會的、歴史的事象の記述の如く、冷靜沈着にして冷やかである。現代をシニカルに觀察する眼が、時代の徴候を具さに認めて細大洩さずこれを書きうつさうとするかのやうである。ここで時代の徴候とは、例へばコンスタンスと姉のヒルダの次の如き生活様式と價値觀に象徴されるものことである。

十五歳になつた彼等は、ドレスデンに遣られ、音樂やその他の學科を學んだ。楽しい日々であつた。學生仲間と自由に過し、男性に伍して哲學、社會學、藝術の諸問題を論じた。彼等は男達と對等に議論した、或は寧ろ、女性であつたが爲に一層勝れてゐた。精神な若者と、ボロン／＼とギターを爪弾いて森へ往つた。ワンダー・フオーゲルの歌を歌つた。彼等は自由であつた。自由！それは實に偉大な言葉であつた。廣々とした戸外で、明方の森で、疲れを知らない素晴らしい喉の若者と一緒に、自由に振舞ひ、とりわけ自由に話すこと！さう、肝腎なことは話すといふこと、熱烈に會話を交すことであつた。戀愛は、ただ二義的なものでしかなかつた。

つまりコンスタンスもヒルダも、最も現代的な自由を得、教養と趣味と精神の自在を愉んでいささかも不安がない。それ故に二人は、「性のスリルを現實のものとして感じたときには、初めて經驗する男達の力に危く屈服するところであつた。が、彼女等は素早く我に歸り、性のスリルを一時の興奮として受止め、元の自由に戻つた。」といふ文章(5)に窺へる如く、「性」を「見事なまでに純粹な自由」の支配下に置かうとするのである。しかし妹のコンスタンスが教養ある女性の自由と青春を謳歌するのは、同書の頁數にして高々十頁足らずの間のことである。彼女の夫となつたクリフォードは、出征し、下半身不随となつた體で歸國する。彼は程なくイングリッド中部の炭鐵所有者たる貴族の家を繼ぎ、「恰もその存在が全て自己の小説の内にあるかの如く」執筆に専心しはじめる。その作品を評して、

觀察は異常で風變りであつた。しかし、接觸が、現實との觸合ひがなかつた。恰も萬事が眞空の中で生じたかの如くであつた。しかも今日の生活の場たるや、概ね人工の光の照し出す舞臺であるから、奇妙にもその小説は現代生活に合致した。現代の心理に(6)適つたといふことである。

と記された言葉は象徴的である。つまり二人は、謂はば小説の中に住まふやうにラグビー邸で日を過す。この生活の眞空は、クリフォードの精神にとつて格好の住家であるが、コニーにとつてそれは「鏡を横切る映像のやうなものであつた」と書かれる。さうして、「何が起きようと何事も起らぬ。何故なら見事にもコニーは何ものにも觸れてゐなかつたから」といふ言葉で表はされた状態の儘二年の歲月が流れる。第三章冒頭で、コニーの精神の變調は既に肉體の異狀を(7)顯すほどに昂進してゐるのである。

『チャタレー夫人の戀人』は、その第一、第二章稿に較べ、コニーの精神を窮地に陥れるに著しく迅速である。第二章稿は、第一章でラグビー邸付近の情景を叙べ、屋敷の生活を語り、クリフォードの係累に言及してはその一族の生活信條を語り、第二章にコニーの父親を登場させて長々と娘の生活の異状を指摘させ、次章ではクリフォードとコニーを森の中に置いてその神秘を感じさせた後に、クリフォードに謂はば心にもない「浮氣」の勧めを行はしめるといふ具合に、話はとりとめもなく生活の塵芥を引摺つたまま、何處へ向ふとも知れない。最終草稿は、逆に全てを端折つて、富と地位と洗練された生活と空虚な精神性の他には何も無いラグビー邸にコンスタンスを押籠める。ローレンスには一點の逡巡なく、この不幸な女性に對して一顧の容赦だに與へない。

それ故にまた作者は、最終稿第三章ではマイクリスといふ著名なアイルランド人の戯曲作家をラグビー邸に招き入れてコニーに目合はせる。マイクリスは、權威と秩序を輕蔑しながら、それらがなければ自らの存在の基盤もあり得ぬといふ意味で、時代の「陰畫」の如き人物である。

彼はゆつくりと、大きく開いた眼をコニーに向けた。その眼は底なしの幻滅に潰つた眼であつた。コニーは少し身震ひがした。マイクリスは、年老いた、際限なく年老いた人間に見えた。地質學上の土層の如く、幾世代にも互つて沈下した幻滅の堆積で出来てゐるやうであつた。同時に彼は、小兒のやうに孤獨であつた。或る意味での無宿人——しかし溝鼠とくまに似た生存に特有の、捨鉢の勇氣を持つた無宿人であつた。

マイクリスとコニーは性的な關係を結ぶが、この關係は「見棄てられた小兒」と母性愛を掻き立てられた女性との關係に似てをり、コニーの得る満足感満足感は、マイクリスの肉體を手段として用ゐて得られる性の興奮である。彼女がド

レスデンで若者との間に感じた「スリル」と本質的な差異はない。

このマイクリスがやがて小説の舞臺から退くことは理解に難くないが、『チャタレー夫人の戀人』に固有の難しさは、コンスタンスが退けねばならぬものに作者自身の「思想」が含まれてゐる點にある。クリフォードの友人のトミー・デュークスは、作者がエセイ等に認めた考へを一貫して主張する人物である。例へばこの人物が口にする次の言葉をローレンス自身のエセイの一節と比較したとしても、兩者の主張の間には殆ど相違點は認められぬ筈である。

眞の知識は、意識の全き全體から——即ち頭腦のみならず腹腔と男根からもやつて來る。精神はただ、分析し理論化できると云ふだけです。いま精神と理性が他のものの上に君臨するとして、それらの爲し得ることは、批判し、しかる後に假死状態を惹起ひきおこすことのみです。いいですか、私はそれが精神に出來る全、たと云つてゐるのです。途方もなく重大なことです。當今世界は、批評を必要としてゐる、殺戮するまでに徹底的に批判しなければならぬ、それ故に精神的生活を送り、我らが惡意に榮光ねたみをもたらし、古き陳腐なる虚偽を暴露しようと思ふ訣です。しかし眞實はかうなのです。つまり人は生きてゐるとき、何らかの形で潑刺たる生命をもつ一つの有機的な全體なのです。ところが精神生活といふものを始めるや否や、林檎の實をもぎとることになる——林檎と樹との繋り、有機的な繋りを斷つて了ふ。そして人生に於て精神生活以外に、何も持たぬとき、その人間はもぎとられた林檎になる——樹から落ちて了ふといふことです。さうなればあとは、林檎の實が腐るやうに、人も必然的に惡意を宿すやうになるのです。⁽⁸⁾

確かにこれは、『チャタレー夫人の戀人について』の中の、既に引用した文章よりも、この小説の思想を本質的な水準

で語る言葉である。クリフォードとは、肉體のみならず精神の「假死状態」をも體現した人物であり、ラグビー邸の生活がコニーをむしばんでゐるのは、それがダービシャーの風土と人々との間に「有機的な繋り」を持たぬからである。さらに、トミー・デュークスは當時の作者が眞實と考へた思想を極端に迄推しすすめる役割を負はされた人物であるから、(彼がコニーにとつて「多かれ少なかれ神託の如き」人であつたと書かれるのはその爲である)「四文字語」をラグビー邸に於る談話の際中にも臆することなく口にする。にも拘らずコンスタンスが次のやうに感じるとすれば、『チャタレー夫人の戀人』を認めた作者の心は別の方向に向けられてゐたと云ふべきである。

コニーには、トミー・デュークスの言葉が正しいといふことが判つてゐた。その通りであつた。ただそれは、コニーを寂しく、この上なく覺束なく孤獨にさせた。荒涼たる池の面に浮ぶ一かけらの木片の如くに彼女は感じた。コニーに關して、或ひは他の何事についてであれ、一體何が問題の核心なのであらうか。(9)

これは、讀者が改めて自ら發せねばならぬ問である。我々の時代の全ゆる事柄に關して、一體何が問題の核心なのであらうかといふ唯一の本質的な問をめぐつて、この小説は展開されるからである。しかも凡そ考へ得る解答は、トミー・デュークスが提出して猶彼は空虚しいのである。

いづれ全てが怖ろしく馬鹿げてゐた。コニーは全てに辟易し、腹立たしかつた。クリフォードに、叔母のエヴアに、オリヴにジャックに、ウィンタースローに、そしてトミー・デュークスにさへ。お喋り、談話、お話し、何と忌はしい、この人間の噪音は。(10)

コンスタンスの怒りが極るからには、トミー・デュークスが「接觸ふれあひの民主主義、肉の復活」と口にしても詮ないことである。つまりさういふ言葉と思想は、彼女が一人の女性として幸せに恵まれることは何ら関係がないからである。コンスタンスの人生が新しい局面に轉ずるのは、クリフォードの看護人ポルトン夫人が邸に住みつくやうになつてからのことである。その直後の彼女の生活は、次の文章によつて象徴的に示されてゐる。

恰も幾千萬の細根、クリフォードとコニーの意識の絲が、絡り合ひ塊となつて、繁茂する餘地をなくした植物が死滅の淵に立たされてゐるやうであつた。今は靜かに、繊細に、二人の意識の絲をそつと断ちながら、彼女は忍耐よく、時々早く離れたいと心せいて、絡つた塊をほどかうとしてゐた。ポルトン夫人の出現は大きな助けとはなつたものの、二人のやうな愛の絆は、他の場合にもまして解き難いものであつた。⁽¹¹⁾

クリフォードについては、既に、「哀れなクリフォードに罪はなかつた。彼の不幸は他の不幸に比較して甚だしいと云ふだけのことであつた。それは慘劇の一部であつた」と書かれてゐるから、引用した文はとりもなほさず、コンスタンスがそれ以前に經驗したものの總體から離脱することを意味してゐる。彼女は、トミー・デュークスの言葉からも精神を淨化せねばならない。既に耳にした言葉は、全て悪夢の中の謔言に似てゐる。さう云ふ言葉は、虚偽に虚偽を重ね、醜惡を糊塗するに醜怪を以てするに異ならぬ。コンスタンスは、既に第六章でこのことに氣付いてゐたと書かれてゐる。

彼女の世代には全ての偉大な言葉は帳消しにされてゐるやうであつた。愛、歡び、家庭、母、父親、夫——全部偉大な躍動する言葉はいま半死半生の状態にあつて日々死滅に向つてゐた。家庭とは人の居住する場所、愛とは人が體面を保つて切り抜けるもの、歡びとは出來のよいチャールストンの爲の言葉、幸福とは他人の眼を欺くために用ゐられる偽善の言葉、父親は自分一人の生活を樂しむ個人、夫とは女が共に生活し精神に於て共に歩む男。性——あの偉大なる言葉はカクテルパーティの術語にして、たまさか人を奮ひたせその後で以前にもましてぼろ屑の如きものにさせる興奮の謂。擦りきれて了つたこと！ まるで人間を造つてゐる素材が安物で、日毎擦り減つて無に歸するやうではないか。⁽¹³⁾

言葉が現實の實體を表現せぬ不満と、實體そのものが光彩を失つて了つた状態が二重にここでは慨嘆されてゐる。そのやうな言葉と虚偽が人間の意識の中で繁茂し肉塊の如くに生長してゐる状態を示す爲に、作者は『チャタレー夫人の戀人』の百頁程を必要としたのである。第二章稿では、それら現代の病狀を記す言葉が最終稿より烈しく、時に醜くさへある。恰もそれ自體が目的であるかの如き書き方がされるが、最終稿ではそれらは、コニーが身を引離す對象として比較的簡潔に記される。作者のヴィジョンに、彼女の未來が少しく鮮明に豫見されて來た、と云ふことができる。

「……コニーは以前よりゆつたりと呼吸した。彼女の人生の新しい局面が開けようとしてゐた。」と書かれた第七章末尾の文章を受け、次章冒頭でポルトン夫人が彼女に森の散策を奨めるときに、コンスタンスの未來は別の方向に轉

ずる。この時迄に彼女は獵番のメラーズと二度程度會つてをり、その内の一度はメラーズが小屋の裏で行水をとつてゐる場面に遭遇しきへしてゐるが、いづれにせよ小説全體が歴然と異質の要素を迎へ入れるのは、作者の豫告に違はず第八章以降のことである。變化の要點は、小説の中に屋外の空氣が感じられるやうなることに存する。これは單なる比喩にとどまらず、そのやうに讀まれねば作者の苦心が殆ど意味を爲さぬといふことである。と云ふのも、第七章迄、作者は努めてコンスタンスに現代文明のバノラマの如きものを目撃させ、その爛熟腐亂した臭氣の中に彼女を閉塞したのであり、殆ど忍耐の限度を——主人公のみならず讀者の忍耐の限度を——超えたときに、やうやくその獄ひとの唯一の扉を開いてやるからである。讀者も亦ローレンスの文體らしきものに出會ふ。この作家に特徴的な、人の息を一區切として自然に呼吸できる長さで言葉を加へる文章が徐々に現れる。それはコンスタンスと讀者の息づかひを等しくし、それらを作者の心のリズムに同化させる働きを有する。

Constance sat down with her back to a young pine-tree, that swayed against her with curious life, elastic, and powerful, rising up. The erect, alive thing, with its top in the sun! And she watched the daffodils turn golden, in a burst of sun that was warm on her hands and lap. Even she caught the faint, tarry scent of the flowers. And then, being so still and alone, she seemed to get into the current of her own proper destiny. She had been fastened by a rope, and jagg⁽²⁾ing and snarling like a boat at its moorings; now she was loose and adrift.

このやうな文のリズムは、觀念の等價物とも言ふべき言葉を綿々と連ねたラグビー邸の生活描寫の際の文章のリズ

ムとは異なる。それは異質な雰圍氣を讀者に感じさせる。同様に、作者の緊張した精神の網がいまは破られようとしてゐるのだといふ豫感をも抱かせる。右に引いた文を第一章冒頭の文章と比べれば兩者の差異は明らかである。

Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically. The cataclysm has happened, we are among the ruins, we start to build up new little habitats, to have new little hopes. It is rather hard work: there is now no smooth road into the future: but we go round, or scramble over the obstacles. We've got to live, no matter how many skies have fallen.

This was more or less Constance Chatterley's position. The war had brought the roof down over her head. And she had realized that one must live and learn.

She married Clifford Chatterley in 1917, when he was home for a month on leave. They had a month's honeymoon. Then he went back to Flanders: to be shipped over to England again six months later, more or less in bits. Constance, his wife, was then twenty-three years old, and he was twenty-nine.

His hold on life was marvellous. He didn't die, and the bits seemed to grow together again. For two years he remained in the doctor's hands. Then he was pronounced a cure, and could return to life again, with the lower half of his body, from the hips down, paralysed for ever. ⁽¹²⁾

右の文章は、硬質にして簡潔な、冷やかな印象を與へる文章である。コンスタンスの人生は、時代の大きな模様の中の微小な點でしかない。それが現代の一典型であるといふ意味で、彼女の人生は記述の對象と言ひたげな作

者の筆致である。他方第八章の一節は、未だローレンスの散文の最良の特質たる新鮮さと躍動感は見られぬもの、やはりそれまでとは異なる段落を迎へた小説の文體である。作者は、高所から鳥瞰する位置から、かなりコンスタンスに近づいてゐる。つまり作者は、彼女と共に時代の圍みを破り別種の秩序に入らうとしてゐる。それを明示して、第七章末尾では、「ロニーは別の世界に (In another world) 放たれるかのやうに、其處で違つた風に呼吸してゐるかのやうに感じた」と記し置いたのであるが、この「別の世界」の雰圍氣は、森の獵番小屋に住むメラーズの用ゐる方言によつても醸成されてゐる、と言ふべきである。

He looked at her again, with his wicked blue eyes.

'Why,' he began, in the broad slow dialect, 'Your Ladyship's as welcome as Christmas ter th' hut an' th' key an' iverythink as is. On'y this time o' th' year ther's bods ter set, an' Ah've got ter be pottenin' abant a good bit, seem' after 'em, an' a' Winter time Ah ned 'ardly come nigh th' pleece. But what wi' spring, an' Sir Clifford wantin' ter start th' pheasants... An' your Ladyship'd non want me tinkerin' around an' about when she was 'ere, all the time.'

言葉は、あたかも初めてその形をとるかのやうに素樸であり、單純な心の動きをそのまま傳達する。殆どが一音節に近い單語は、硬質、銳利、明晰さからは程遠い、各々が發聲者の肉の^{ふたふた}温みを有する語である。コンスタンスにも讀者にも、メラーズの用ゐるダービシア訛は言葉の指向性に於て著しく曖昧であり、幼兒語にも似て、ゆつたりと優しい雰圍氣を醸し出す。初期の小説に於てはイングリランド中部地方の下層社會の生活を寫す爲に用ゐられた方言が、こ

ここでは精神文化の爛熟した時代の精神性に對する對極の價値を擔つてゐる。これは、後に述べる「四文字語」の使用に關連して重要なことである。同じ章で作者がクリフォードとコンスタンスを森に遊ばせるのも、「自然」に向ひあつたクリフォードの反應を示すことによつて、クリフォードとメラーズの世界の差異を際立たせる爲に他ならない。クリフォードは、アネモネの花を眺めながら「汝、未だ犯されざる靜謐の花嫁」なるキーツの詩句を暗誦し、「ギリシヤの壺よりもむしろ花に適しい言葉だ」と語る。銜學的であると云ふよりも、これは教養が生の實體に化した人間の究極の姿である。コンスタンスは、「世界を毒してゐるのは人間だわ」と自ら口にした言葉の證を得て夫に對する嫌惡が滾るのを感じる。「犯されるですつて！人間は觸られることがなくても犯されて了ふのだわ。死滅した言葉に犯されて卑猥になり、死滅した觀念に犯されて我執が生れる。」と思ふのであるが、その一兩日後に聞いた獵番の言葉が彼女の胸底に植ゑつけたものの正體は、無論すぐさま彼女に了解される性質のものではない。むしろ、理解と云ふ類の意識に上るものであつてはならないのである。「Only as 'appen yo'd like the Place ter yersen, when yer did come, an' not me messin' abahnt.'」といふ言葉は、それ故陰然たる力を宿す呪文の如き言葉である。次章冒頭で、コンスタンスが夫に對して肉體的、生理的な嫌惡を感じてゐる自分自身に吃驚したと書かれてゐるのも、その呪文の響きが知らぬ間に彼女の感性を變質させたことを示してゐる。

『チャタレー夫人の戀人』は痛ましい小説である。その理由の一つは、現代の醜狀を記す作者が、この作者の他の作品には似ず用意周到で、凡そ容赦といふものを感じさせぬからである。ローレンスは、心中の憤怒と嫌惡をひたすら内向させ、そのものとしては小説にあらさまに表さぬまゝ、時代の病狀を審さに點檢する。文學者として醜いクリフォードに、實業に志す人間としても一層慘絶なる姿を晒す役割を負はせるのは、さういふ意圖の現れである。コン

スタンスが新しい世界の息吹を身近に感じ始めるとき、逆にクリフォードは正反對の道を完うする。ポルトン夫人から炭鑛の生活を聞かされる内に、彼は自ら所有する炭鑛を興隆させ己が存在を顯示したいと云ふ實業家の願望を抱く。言葉の空虚が、物理的な實體に裏打ちされた空虚に變る。しかもクリフォードは、無知無能の癡呆者の如くポルトン夫人に依存し、コンスタンスにすがる。彼は今や、「硬質で器用に動く外殻と、どろつとした内部を持つ生物、機械といふ鋼鐵の殻と柔い内部組織を持つ脊椎のない甲殻類、現代の工業と財政社會の驚くべき蝦、蟹の類」に變身するのであり、看護婦のポルトン夫人に對しては、「あたかも半ば愛人、半ば乳母に對するが如く、無情熱といふ一種の情熱を傾けて自己をひけらかす」のである。コンスタンスは嫌厭の念に加へて恐怖心さへ抱くに至る。夫に關ることによつて現代といふ時代の狂氣に引入れられる豫感に慄然とする。さうして或る日、「本當にもう自分は死んでゐるのではないか」「邪惡な虚偽と白癡の驚くべき殘酷さに押しひしがれ死にかかつてゐるのだ」と感ずる怖ろしさの極みに、彼女が森に蹲つて泉の湧き水を見つめながら物思うてゐるとき獵番が近づいて來る、といふ風に話が轉ずると、讀者にはもうそれだけでメラーズを受容れる準備が整つてゐるのである。

しかし乍らローレンスは、既にコンスタンスの思ひを藉り、「現代社會は狂つてゐる。金錢と、所謂『愛』が最も救ひ難い狂者だ」と明言してゐた。作者がメラーズに、寧ろコンスタンスを忌避させるのも、讀者を焦らせて最終的に二人が結ばれる際の効果を高める術策ではない。それは、作者の心の常態の自然な反映と云ふべきものである。メラーズの方言でさへ、獵番の意圖に於てはチャタレー卿夫人との間に故意に設けた障壁であつた。コンスタンスの氣紛れから孤獨な生活を亂されてはかなはぬと思ふメラーズは、主人の反感を買はぬ程度に殷勤に接し、彼女もまた獵番の舉措に自己を忌避する趣を察知する。ただ彼女には、森が唯一の慰藉であり、「少なくともメラーズは正氣で健やか」であるから、足しげく雉の孵化場に通ふ。そして再び「或る日」、コンスタンスが次のやうな場面に遭遇する

とき、彼女は無意識の内に求めてゐたものを見出すことになるのである。

それから或る日、榛の木々の下に櫻草の大きな房が咲き、小徑の方々に葎が斑點をつくつてゐる素晴しく晴れた日の午後、コンスタンスが鳥小屋のある場所を訪ねてみると、小さな、ほんたうに小さな雛が籠の前を誇らし氣に駆けまはつて、母鳥は動轉して啼いてゐるのであつた。灰色がかつた褐色のしなやかな身體に黒っぽい斑のある小さな雛は、そのとき世界の中で最も生き生きとした、生命の火花であつた。コニーは蹲り、恍惚とした氣分で見つめた。生命！ 生命！ まざり氣ない火花の、勇敢な新しい生命！ 新生！ あのやうに小さくて、しかも微塵も怖れを知らぬいのち！ 母鳥の警告の聲にすこしばかり驚き、鳥籠の中に駆け戻つて、その羽毛の下に消え去つたときにも、雛鳥は心底驚いた訣ではなかつた。ただ遊び半分でさうしたにすぎない。それは戯れの生物であつた。何故なら、一瞬の後に、鋭つた小さな首を親鳥の金茶の羽の下から突き出して、それは宇宙を見つめてゐただから。

コンスタンスの望みは唯一、「森なかのその開けた場處に行くことのみ」となり「殘餘のことは、一種の苦しい夢になつた」と書かれる。「現實」は夢に變じ、「宇宙」に首を突き出した雛の棲む世界が、彼女の思ひの宿る現實味ある場處に變る。幾日かを経た「或る夕刻」、「顔を火照らせ夢うつつ」でコンスタンスが鳥小屋に辿り着くと、獵番のメラーズが居て恰度雛を了ひ込むところである。彼女は、蹲つて雛を眺める内に自分自身の手で觸れてみたい衝動に驅られ、籠に入れようとするが、雌鳥の抵抗にあつて果さない。メラーズは、母鳥の羽の下から雛を取出し彼女の掌に載せてやる。

獵番も彼女の傍に蹲んで、掌の上の大胆な雜を愉しさうに眺めてゐた。突然、涙がコンスタンスの手首に落ちかかるのが見えた。

獵番は立上り、その場から離れて別の籠のところへ歩いて行つた。永遠になりをひそめてゐたと思つた往昔の焰が、突如腰部を刺し貫き、跳梁するのに氣づいたからである。獵番は抗ひ、彼女に背を向けたが、それは跳びはねて下方に移り、膝の邊を旋回した。

獵番は振返つてコンスタンスを見た。彼女は膝まづき、ゆつくりと兩手を差出し、母鳥の下にやみくもに雜を戻さうとしてゐた。その姿にはどこか、この上なく寂しい靜かなところがあつた。獵番の腹腔にあはれみの念が燃え立つた。

知らぬ間に彼はコンスタンスに近づき、蹲み込んで、母鳥に怯えてゐる彼女の手から雜を取上げると、籠の中に戻した。彼の腰の奥で、焰は一層はげしく競立つた。

メラーズは彼女の方を氣づかはしげに見やつた。コニーは顔をそらせ、彼女の世代の全ゆる苦悶をこめ、身も世もなく哭いてゐるのであつた。彼の心は突如溶け、火の滴に似たものに變じて、彼は手をさし伸べて彼女の膝に觸れた。

「泣いてはいけない」メラーズはやさしく云つた。

彼女はしかし兩手で顔を蔽ひ隠し、本當に心臓がはり裂けて了つたのだ、いまはもう何がどうなつても構はないのだと感じた。

メラーズは彼女の肩に手を置いた。手は、やさしく柔く、背を傳ひ、盲目的に撫でながら、蹲つた腰の曲線に

屈くと、柔く、柔く本能的に愛撫しつゝ、脇腹の線をなぞつた。

彼女はハンケチを取出し、懸命に涙を拭はうとしてゐた。

「小屋に來るから」と、静かな落着いた聲でメラーズは云つた。(中略)

With a qucer obedience, she lay down on the blanket. Then she felt the soft, groping, helplessly desirous hand touching her body, feeling for her face. The hand stroked her face softly, softly, with infinite soothing and assurance, and at last there was the soft touch of a kiss on her cheek.

She lay quite still, in a sort of sleep, in a sort of dream. Then she quivered as she felt his hand groping softly, yet with queer thwarted clumsiness, among her clothing. Yet the hand knew, too, how to unclotie her where it wanted. He drew down the thin silk sheath, slowly, carefully, right down and over her feet. Then with a quiver of exquisite pleasure he touched the warm soft body, and touched her navel for a moment in a kiss. And he had to come, in to her at once, to enter the peace on earth of her soft, quiescent body. It was the moment of pure, peace for him, the entry into the body of the woman. She lay still, in a kind of sleep, always in a kind of sleep. The activity, the orgasm, was his, all his; she could strive for herself no more. Even the tightness of his arms round her, even the intense movement of his body, and the springing of his seed in her, was a kind of sleep, from which she did not begin to rouse till he had finished and lay softly panting against her breast. (22)

コンスタンスとメラーズが交りを結ぶ、これは最初の場面である。この場面に著しい特徴は、ロニーはつゞつては殆

ど全て、メラーズに關しては半ばの意識が削ぎとられてゐることにある。一方的にメラーズはコニーの内體を通り過ぎ、コニーは深い眠りの只中で時を経る。事後に彼女は「朧ろ氣に訝む。何故これが必要だつたのだらう。何故それは彼女の内から大いなる雲を生み、平安を與へたのか。あれは現實のことだつたかしら、現實に？」と自ら顧ざるを得ない。明らかにこれは、不自然にして現實味のない二人の交渉であり、作者の筆にもいま一つ躍動感が感じられない。讀者に感動を與へるのは、寧ろ、コンスタンスが衣服を整へ、「椗の梢高く殘照の輝く上方に、明るく小さい月を見」ながら二人が木下閣を歩く次のやうな場面でメラーズが口にする言葉である。

「後悔はしてゐないだらうね」

コンスタンスの傍を歩きながら、メラーズが訊いた。

「とんでもない。あなたは悔んでるの」

「あのことについてはさうぢやないさ……。しかし他にも色々な事があるからな」とメラーズは云つた。

「どんなことがあつて」

「クリフォード卿や他の人達。例のごたごたさ」

「何故ごたごたなの」失望して彼女は云つた。

「いつもさうなのさ。あんたにとつても己にとつてもいつもごたごたがあるのさ」

メラーズは暗闇の中を確固たる足どりで歩き續けた。

「そして、後悔してゐるつて訣？」

「さう、ある點ではね」メラーズは空を仰いで云つた。

「もう手を切つたと思つてゐたんだが。また己は始めて了つたんだ」

「何を？」

「^{ライヴ}人生を、さ」

引用文が直接意味することは、コンスタンスの肉體に觸れたメラーズが、さうすることによつて人生の諸拘束を受け容れて了つたことを自覺した、といふことである。しかし彼の念頭を去らぬものが世の煩雜な人事の記憶であるとしても、(即ち抄出した文中で「^{三〇}」は「人生」の意であるとしても)彼が一言「Life」と口にした言葉は、森に育まれたか細くしかも勇敢な雛鳥の姿を眼前に彷彿させ、『チャタレー夫人の戀人』全體の意味を鮮明ならしめるのである。

いかにもメラーズの「森」は、「生命」を新たにする場處の謂である。あたかも大災害を逃れた男女が、更めて「人間」の生を生き始めようとする場處である。機械文明を憎み、喧噪を厭ひ、現代社會とそれが不具にした人間を憎む一組の男女が、最も卑俗なものにすがつて「人間」を更新し未來を生み出さうとする場處である。その課題が首尾よく二人に果せるか否かについては、作者は一切を不問に附す。他の登場人物に對してこの上なく辛辣であつた作者は、この二人に對しては限りない愛情を注ぐ。つまり冷靜な心で問へば、二人に人間の未來を生み出す課題が擔へるか否かは、最初から答への解りきつた問である。しかし人が假に機械の一部分ではなく、時代の指定した臺詞を復唱する氣のきいた精神の儡^{くわい}ではないとすれば、「現代」の壊滅した後に再生すべき人間の條件は、作者にとつては疑ひやうもなく決定してゐたのである。それは、最も單純で平易な、人が生きてゐる限り片時も離れることのない「生命」に觸れた人間でなければならなかつた。男が男であり女が女である紛ふ餘地ない事實の前に、謙虛に身を委ねる醇朴な

心を保持した人間でなければならなかつた。それ故に、二人が交りを結ぶ爲には凡そいかなる動機も名分も必要ではないのである。彼等は現代文明の齷す醜さに怖れ、やうやく見出した安息の「森」に逃げ込んだ人間の末裔の如きものであるから、肉體が完うまうたに感觸に應じ、健やかに他を迎へる本能が死滅してゐなければ、それ以外のものは寧ろ不必要なのである。人の枝葉と末節は腐亂して異臭を放つ時代であれば、本源のものを在るべき處に保つて末梢を斷つ寂智だけがこの時代には尊い、と作者は言ひた氣である。しかしローレンスは、(何度も繰返すやうだが) コニーが自らの力でその寂智を得たといふ風にはこの小説を書いてゐない。ただ一舉に、現代の奈落に彼女を突落して、執拗に、或る意味でサディスティックなまでにこの女性を苛んだ揚句、一つだけ逃道を開いてやるのである。その仕儀が小説家として殘酷であると云ふ者には、『三色堇』(Pansies) や『ぶらぐや』(Nellies) の詩に窺へるやうに、私らの時代は人間に何をしたかと反問する頑迷な心を彼は始終抱いてゐる。作者が望む讀者は、醜いものに憐憫を示す讀者ではなく一層これを憎む者である。クリフォードを憐むよりは彼を憎悪して已まぬ感情が、今の時代には唯一健やかで尊いことを教へて、その惨あつたしい心にもみ一層優しい人間の結びつきが生じ得ることを示さうとしたのである。それ故に『チャタレー夫人の戀人』の中で作者の筆が最も温ぬくみを帶び、作者の心の感觸を傳へながらコンスタンスの見知つた世界に讀者を導き入れる十二章終り近くの數頁は、その夢幻にも似た愉悅の實感によつて作者がそれ迄の苦しみを償はねばならぬ箇所である。⁽²¹⁾ ローレンスは言葉を重ね、イメーチを連ね、執拗に優しく、一點の疑心も生まぬやう、コンスタンスの存在と讀者の感性の内奥に分入つて、その精髓のところまで止めを刺さうとする。

She quivered again at the potent inexorable entry inside her, so strange and terrible. It might come
with the thrust of a sword in her softly-opened body, and that would be death. She clung in a sudden

anguish of terror. But it came with a strange slow thrust of peace, the dark thrust of peace and a ponderous, primordial tenderness, such as made the world in the beginning. And her terror subsided in her breast, her breast dared to be gone in peace, she held nothing. She dared to let go everything, all herself, and be gone in the flood.

And it seemed she was like the sea, nothing but dark waves rising and heaving, heaving with a great swell, so that slowly her whole darkness was in motion, and she was ocean rolling its dark, dumb mass. Oh, and far down inside her the deeps parted and rolled asunder, in long, far-travelling billows, and ever, at the quick of her, the depths parted and rolled asunder, from the centre of soft plunging, as the plunger went deeper and deeper, touching lower, and she was deeper and deeper and deeper disclosed, the heavier the billows of her rolled away to some shore, uncovering her, and closer and closer plunged the palpable unknown, and further and further rolled the waves of herself away from herself, leaving her, till suddenly, in a soft, shuddering convulsion, the quick of all her plasm was touched, she knew herself touched, the consummation was upon her, and she was gone. She was gone, she was not, and she was born: a woman.

Ah, too lovely, too lovely! In the ebbing she realized all the loveliness. Now all her body clung with tender love to the unknown man, and blindly to the wilting penis, as it so tenderly, frailly, unknowingly withdrew, after the fierce thrust of its potency. As it drew out and left her body, the secret, sensitive thing, she gave an unconscious cry of pure loss, and she tried to put it back. It had been so perfect!

And she loved it so! (22)

一篇の象徴詩にも比すべきこの引用文で、コニーの陶醉は海になぞらへて示される。暗い海潮がうねり、巨大な波が海を分け海底を露はにするときに、メラーズの男性の力がそれ迄覆ひ隠されてゐた彼女の實體に觸れて、彼女は文字通り *ecstasy* の境地に達する。未だ體驗したことのないこの境地を、彼女は自己自身の誕生、一人の「女性」の誕生として感知するのである。しかしさらに大切なことは、肉體と精神が新しい生の波に滌はれてはじめて彼女が一人の「男性」を識別するといふことであつて、このときに「人間」といふ名の肉をまとふものへの畏敬の念が生じるところを作者は示唆してゐる。つまり他の者との關係に入る爲に、人は新たに「男性」或は「女性」として生れねばならない。「肉の復活」とは即ちこのことに他ならぬが、その再生がいかに困難であり、一人の人間の内部で「死」の實感を伴ふほどの激しい衝撃と、それ故に本能的な反撥とを招くことについては、作者は殆どこの書では觸れることがない。つまりは『チャタレー夫人の戀人』のモチーフはそこにはない。それらは既に『戀する女』(*Women in Love*)に於て、パーキンとアシュラー、ジェラルドとグッドルーンといふ二組の男女の「愛」の形態として示したことである。『チャタレー夫人の戀人』最終稿では、作者はコンスタンスの意識を麻痺させ、彼女の精神の葛藤を最初から不可能にした上で、彼女をただ「性」の潮の滌ふにまかせるのである。

And now in her heart the queer wonder of him was awakened. A man! The strange potency of manhood upon her! Her hands strayed over him, still a little afraid. Afraid of that strange, hostile, slightly repulsive thing that he had been to her, a man. And now she touched him, and it was the sons of god

with the daughters of men. How beautiful he felt, how pure in tissue! How lovely, how lovely, strong, and yet pure and delicate, such stillness of the sensitive body! Such utter stillness of potency and delicate flesh. How beautiful! How beautiful! Her hands came timorously down his back, to the soft, smallish globes of the buttocks. Beauty! What beauty! a sudden little flame of new awareness went through her. How was it possible, this beauty here, where she had previously only been repelled? The unspeakable beauty to the touch of the warm, living buttocks! The life within life, the sheer warm, potent loveliness. And the strange weight of the balls between his legs! What a mystery! What a strange heavy weight of mystery, that could be soft and heavy in one's hand! The roots, root of all that is lovely, the primeval root of all full beauty.

She clung to him, with a hiss of wonder that was almost awe, terror. He held her close, but he said nothing. He would never say anything. She crept nearer to him, nearer, only to be near to the sensual wonder of him. And out of his utter, incomprehensible stillness, she felt again the slow, momentous, surging rise of the phallus again, the other power. And her heart melted out with a kind of awe. (82)

人と人との繋りの基礎に、或は人と自然との関係の源初に、ローレンスが引用文中に窺へる「畏怖」と神異の念を置いたことは明白である。言葉や觀念があれ程迄に嫌厭されたのは、それらが存在するものを自らの「対象」として捉へ、際限なく己れに同化することによつて、自他の區別を辨へぬ迄に存在を毒する陥穽を本來的に有するからである。メラーズが口を閉して一言たりとも語らうとしない決意は、最も危いものを知る人間の平常心に他ならない。さ

ういふメラーズの決意を了解するとき、この直後に交される會話の思ひがけぬ展開によつて、讀者は『チャタレー夫人の戀人』の意圖が何であるかを感得することになる。コンスタンスは、おそらくはふとした氣紛れからメラーズの方言を真似る。長い引用であるが以下十二章末尾まで引いてみる。

'The mun come one naight ter th' cottage, afore tha goos; sholl ter?' he asked, lifting his eyebrows as he looked at her, his hands dangling between his knees.

'Sholl ter?' she echoed, teasing.

He smiled.

'Aye, sholl ter?' he repeated.

'Ay!' she said, imitating the dialect sound.

'Yi!' he said.

'Yi!' she repeated.

'An' slaip wi' me,' he said. 'It needs that. When sholl come?'

'When sholl I?' she said.

'Nay,' he said, 'th canna do't. When sholl come then?'

'Appen Sunday,' she said.

'Appen a'Sunday! Ay!'

He laughed at her quickly.

'Na, tha canna,' he protested.

'Why canna I?' she said.

He laughed. Her attempts at the dialect were so ludicrous, somehow.

'Coom then, tha mun goo!' he said.

'Mun I?' she said.

'Maun Ah!' he corrected.

'Why should I say *maun* when you said *mun*?' she protested. 'You're not playing fair.'

'Are na Ah?' he said, leaning forward and softly stroking her face. 'Th'art good cunt, though, aren't ter? Best bit o'cunt left on earth. When ter likes! When tha'rt willin!'

'What is cunt?' she said.

'An' doesn't ter know? Cunt! It's thee down theer; an' what I get when I'm i'side thee, and what tha gets when I'm i'side thee; it's a' as it is, all on't.'

'All on't,' she teases. 'Cunt! It's like fuck then.'

'Nay nay! Fuck's only what you do. Animals fuck. But cunt's a lot more than that, It's thee, dost see? an' tha'rt a lot besides an animal, aren't ter?—even ter fuck? Cunt! Eh, that's the beauty o' thee, lass!'

She got up and kissed him between the eyes, that looked at her so dark and soft and unspeakably warm, so unbearably beautiful.

'Is it?' she said, 'And do you care for me?'

He kissed her without answering.

'Tha mun goo, let me dust thee,' he said.

His hands passed over the curves of her body, firmly, without desire, but with soft, intimate knowledge. As she ran home in the twilight the world seemed a dream; the trees in the park seemed bulging and surging at anchor on a tide, and the heave of the slope to the house was alive.⁽²⁴⁾

一讀して明らかな如く、これは『チャタレー夫人の戀人』の内おそらくは唯一讀者の微笑を誘ふ場面である。コンスタンスが戯れに方言で物言ふのを聞いて獵番も微笑む。彼女はメラーズの口眞似をし、メラーズは彼女に「四字語」を用ゐて彼女の魅力の由來する處を語る、といふのである。彼女はその「言葉」を知らぬから、メラーズに教へを乞ふ訣であるが、二人の振舞は小兒の戯れに似てをり、それはそれで互ひに心と軀を許した男女の閨房の睦言にも聞え、二人の性愛の歡びを逆に印象させる場面である。しかし、ラグビー邸に向ふコンスタンスにとつて、「薄明」の世界が「夢の如く」に見え、「私園（プライベート）の樹々は波間に停泊してうねり膨れ、邸に至る坂の起伏は生きてゐた」と記された結びの言葉を讀めば、作者の意圖は既に明白であると云ふべきである。即ち二人は、他愛ない言葉をきつかけてして、人と世界の源初の關係に立歸つてゐたのである。コンスタンスの口にした素樸な方言は、恰も人の發する最初の言語の響きを宿しもつ。言葉は未だ、「存在」とその生命に觸れてをらず、「存在」はまた言葉と意識の作用を蒙る以前の狀態にあつて健やかなのである。メラーズはそれ故、この場面で、「もの」に言葉を與へる最初の男性である。コンスタンスはそれを嬉々として習ひ、己れもまた口にして名づける最初の女性である。その言葉が女性の生殖器を指す語であつたことは、無論この小説の主題に係ることである。しかし眼目は、斷るまでもなく、生殖器の名稱

をあからさまに口にすることにはない。『チャタレー夫人の戀人』の主題は、「自然」といふ名の胎に孕まれたコンスタンスとメラーズといふ二人の人間の出生を記すことにあるからである。二人は當然にも小兒の如く無心でなければならぬ。コンスタンスの眼前で、世界は夢幻の如くうねり動き、坂でさへその固有の生命を得て生動する。即ち『チャタレー夫人の戀人』によつて、作者は一組の男女の生誕と、それによつて生じる「世界」に關する一つの「神話」を記し置かうとしたのである。

一九二九年、死の前年に書かれた『黙示論』(Apocalypse)が新約聖書卷末の書に對するローレンス独自の注釋書であるとすれば、『チャタレー夫人の戀人』は、現代といふ時代の爲に書かれた「創世記」である。晩年のローレンスが、現代社會に對するよりも、エトルリア人の遺した文化や舊約聖書の世界、或は古代ギリシャの神話世界に對して強い現實感、親近感を抱いてゐたことは、『チャタレー夫人の戀人』と相前後して描かれた繪畫の題材を見ても容易に了解される。「Flight Back into Paradise」「Fauns and Nymphs」「Rape of the Sabine Women」「Leda」「Renaissance of Man」「Throwing Back the Apple」「Finding of Moses」「Venus in the Kitchen」等々と名づけられた繪畫には、例外なく口髭を貯へローレンス自身か或はキリストを彷彿させる裸身の男性が、時には裸婦と抱擁を交し、時に恍惚として踊る様が描かれる。それらの醸成する雰圍氣は、現代社會とは「時」と「空間」を異にした異質の次元のもつ雰圍氣であり、一言で言へばそれらは、現實性の稀薄な神話の世界の一コマである。『チャタレー夫人の戀人』に於ても、作者は既に述べた第八章の初めで、「一粒の麥もし地に落ちて死なずば……」の言葉がコンスタンスの腦裏をかすめたと書き、森に入るや否や陽を受けたアネモネの花の反射光が周邊を蒼白く輝かす情景を、「世界は汝が息のために蒼ざめたり」とスウィンバーンの詩句を引いて形容しつつ、「この場合にはそれはベルセフォ

ニの息のことであつた、ベルセフォニが冷い朝に地獄から出てきたのであつた」と書く。さらには枝に絡れた風を指して「捉はれのアブサロムのやうに身をもぎ離さうとしてゐた」と譬へるのである。これらは、小説の轉換點たる第八章の初めに現れるといふ、まさにその事實によつて、第十二章末尾のクライマックスへの伏線であることは明白であるやうに思へる。なるほど現代の神話を書き置く作者の意圖は果され、「四文字語」は、新しき世界でその生誕を可能にした肉體の器官と機能を讀へる爲に用ゐられたのである。

にも拘らず——或は、既にその課題を終へた爲に、と書くべきかも知れぬが——第十二章以降この小説は、作者の企圖を不明瞭ならしめる箇所を隨所に露呈させる。例へば十五章冒頭の數頁では、メラーズが突如文明批判を開陳し、時にラテン語さへ交へて高説を披瀝する傍でコンスタンスがこれを拜聽する場面が現れる。その部分の英國人を愚弄する箇所に至つては、殆ど讀むに耐へぬほどに淺薄な印象を與へる。メラーズが教養ある男性であることは既に示唆されてゐたにせよ、餘りに唐突なこの變化は、寧ろ作者と作品の間の——作者の偽りのない心情と表出ししようとした世界との間の——烈しい落差に似たものを感じさせる。即ち、當初この作品を「*Inderness*」と名づけようとした作者は、實際は *inhuman* な慘い心でこれを書いてゐたのではなからうかといふ疑念を抱かせる。『チャタレー夫人の戀人』とその「性」が眞の意味で問題とされねばならぬのは、實はこの次元に於てなのである。メラーズは云ふ。

大佐はいつも言つたもんだ。「若い、いいかい。イギリスの中産階級の連中ときた日には、一口ごとに三十回は嚙まなけりやならん。何故かと言ふと、連中は腹が小さいから、豆ほどの大きさのもでもつまつて了ふからだ。彼奴等は今までに創られた女形の中でも一番ケチな人間だ。自惚れだけは強くて、靴の紐が曲つてゐると、

それだけでもうどぎまぎする。女郎のやうに腐りきつてゐるくせに、口にすることはいつも正しい。儂は實際まゐつて了つたよ。ペこペこと平身低頭しながら、舌がざらざらになるまで他人の尻を嘗めてまはる。それでもいつも理窟だけは満點で、とりわけ彼奴等は氣取屋ときてゐる。さう、辜丸ポールが片方しかない、女の腐つたやうな氣取屋ばかりの世代——」⁽²⁵⁾

或はこれは「大佐」の言葉を傳へるだけでメラーズの本心ではないとも考へられる。嘲弄の對象はあくまでも中産階級に屬する人間である。しかし續けて語られる言葉は、平生より一オクターブ高いがしかし明らかに作者の心情を映し出す言葉であり、作者の嫌惡は階級の別なく現代に生きる全ての人間に向けられてゐる。

全部が全部、根性スピンをなくして了つた。自動車や映画や飛行機に、最後の一滴まで搾りとられて了つた。世代が替るたびにますます、ゴムの内臓とブリキ製の脚と顔をもつた兎のやうな人間が作り出されてゆくんだ。ブリキ製の人間！ そいつらは皆、人間を殺して機械的なものを崇めるポリシェヴィキの手合だ。金、金、金！ 現代人は全て、古い人間的感情を殺し去つて、アダムとイヴから挽肉をつくるときにぞくぞくする興奮を味はふんだ。彼等は皆同じ、世界も似たりよつたり。人間の本體を殺して、包皮一枚につき一ポンド、辜丸ポール一對につき二ポンド支拂ふわけだ。cunt とは fuck する機械のこと！ 皆同じことだ。世界の cock をちよん切るために金錢を拂ふといふわけだ。⁽²⁶⁾

「四文字語」はここで、メラーズの憤りと憎惡を傳へるための、ただの卑俗な言葉でしかない。それらは、リーヴ

イスが指摘した「衛生學的取組み」といふ役割さへ果してゐない。これほどに烈しく時代と人間を憎む者が、一體どのやうな経路を辿つて「優しさ」に至ることができるか。私らの訝む處とローレンスにとつて最も困難であつた處はおそらく別箇のものではなかつた筈である。一度目に作者はコンスタンスの意識を麻痺させ、二度、三度の交りに於ては彼女を全て許容する従順な女性に變へ、更にはメライズの慾望に當惑と口惜しさを感じつゝも彼の面前ではそれをひた隠しにする健氣な女性に仕立ることによつて、既に見た第十二章の極點に達することが出來た。逆に言へば、この小説は『虹』や『戀する女』の持つ普通の社會的背景と正常にして自然な登場人物を持たない、といふことである。さうありたいと願ふ作者の願望は、至る處で絶望と憎惡によつて裏切られるのであり、作者が首尾よくこの小説を書き終へる爲には、恰もクリフォードといふ生贄が最後迄必要であつたかの如くである。『チャタレー夫人の戀人』最終稿は、作者が主要な作中人物の一人を全うな人間として描く意圖を持たなかつた數少い例外的作品である。逆に言へば、そのやうに酷薄な異例の扱ひをしてまでもローレンスには後世に遺さねばならぬ「福音」の言葉があつたといふことである。事實この書が或る窮極的な義務意識から書かれたことは明らかであつて、それは例へば同書ではメライズとコンスタンスが交りを結ぶ最後の場面からも知られるのである。

「それぢや貴方、愛してゐるのね、私のことを愛してゐるのね」とコンスタンスが叫んだ。それは、言葉にならぬ盲目の歡喜に似た小さな叫びであつた。メライズは彼女の中に、自分の腹腔から彼女のそれへ放たれる優しさの流れを感じつゝ、そつと入つた。二つの腹腔が愛憐に點ともされて交つた。

その瞬間彼は、これが自分の爲さねばならぬことだ、男としての尊嚴を失はず、完璧さも喪失せず、優しい感觸のうちに入つてゆくことがそれだ、と理解した。(傍點引用者)

この場面のコンスタンスは、「愛」を求める心を拭ひきれない女性である。既にメラーズの兒を宿し、夫との離別を決意した彼女には、愛情を強要する素振りさへ窺へる。メラーズは他方、コンスタンスが妊娠したと聞いて表情を失ふ。「嬉しい、と言つて！」と彼女に促されたとき、メラーズは、「怖ろしいほどに未來といふものが信じられない」と呟くのである。

(二)

晩年のローレンスは、メラーズの言葉に窺へるやうに、「怖ろしいまでに」人間の未來に絶望してゐた。「死んだ男」が甦つたときに感じた「嘔吐感」は、生前に抱いた現世に對する嫌悪が身體の生理的機能をも侵してゐたことを物語つてゐる。しかし同時に、『チャタレー夫人の戀人』執筆當時のローレンスには、人間の社會との結びつきを渴望する心が残つてゐた。この執着を最終的に斷つたものは、私家版として出版した同書の頒布に對しても爲された英國官憲の介入と、一九二九年七月ワレン・ギャラリーで開かれた個展で、展示中の繪畫十數點が押收された事件であつた。爾後のローレンスは、現代世界の痕跡を拭ひ去り、『アポカリプス』「死の船」に表徴される最晩年の世界に入る。『チャタレー夫人の戀人』は、「私に觸れてはいけない」と言つた「死んだ男」と、他の箇所では「己はお前に觸らねばならんのだ」と悲痛な叫び聲を擧げる獵番の、相矛盾した兩極を宥和させようとした試みである。『チャタレー夫人の戀人』に見られる「落差」はこの矛盾した兩極から生じるものであり、兩者の間に均衡をもたらす企圖の困難さが、三度に亙る同書の改稿を餘儀なくさせた主要な原因でもあつた。しかしそれほどに困難な課題が、ローレンスには何故「性」によつて果されると考へられたか。そもそもこの作家の無意識の領域で、「性」はどのやうな形で存

在したか。『チャタレー夫人の戀人』改稿の過程は、別の角度から検討されねばならないのである。と云ふのも、リーヴィスの指摘に違はず、最終稿は、他の長編小説に類を見ぬほどに——強いて類例を挙げれば『翼ある蛇』(The Plumed Serpent)が考へられるが——作者の意識的統制を蒙つてをり、不自然なまでの硬直性が感じられるからである。他方第二稿は、作品としての完成度は最終稿に劣るとはいへ、執筆當時の作者の心理を比較的忠實に映し出してゐる。兩者を對照するとき、最終稿では作者の意志の下に壓しひしがれたものが、元來どのやうな形で作者自身の無意識の領域で形をなしてゐたかが理解できるのである。

第二稿第三章は、晩秋の或る晴れた日、コンスタンスと車椅子に乗つたクリフォードがラグビー邸所領地の森に入る場面で始つてゐる。

……薄い金色の濃密な光と、濃いかげらふの氣配を漂はせ、暖く、やはらかな曖昧さに包まれた不可思議な十一月の一日は、コニーには完全に現實味を缺いた日のやうに思へた。樫の木と枯れた草の生えた私園^{パース}では、羊が黙々と斜面で草を食み、さう遠くない場所にかかつた乳白色の霧の合間に、やがて散らうとする黄と褐色の樫の葉が認められた。それは彼女にはこの世のものではないもの、過去から出現した幻^{ヴァイジョン}のやうに思へた。十八世紀末から甦つた亡靈のやうな一日、古い版畫^{エングレーヴィン}に漂ふやうな一日であつた。往昔には英國の風景は、やはらかい眞實の美しさを顯した。それが今なほ亡靈の如く、こつそりと姿を見せる時があつたのである。⁽²⁸⁾

この描寫は、現代の英國が今も死者の倂を宿してゐること、逆に言へば、新しい生命が未だ誕生してゐないことを

直接的には示してゐる。それは例へば、「陽は車椅子の上に落ちた。クリフォードの顔の上にも落ちた。静寂は、夥しい数の亡靈の静寂であつた。」と書かれる所からも明白である。下半身不隨のクリフォードは、生ける肉體に既に死を具へた人間であるから、クリフォードと車椅子に象徴されるものは「生命」の對極にあるものである。しかし死の名残をとどめた私園プライベートの描寫は、にも拘らず幽かで美しいのであり、やがて至りつく「森」のもつ過去の殘影も、作者にとつて完全に否定的なものではあり得ない。「コンスタンスはぼんやりと周囲あたを見回した。森は未だ、古きブリテンの無垢の神秘、ドルイド僧のブリテンの神秘さへとどめてゐるやうに思へた。」「どういふ訣か、森の中で彼女は別の力を感じた。神秘的な何かが生きてゐるのを感じた。」といふ文章がそれを示唆してゐる。つまり「死」や「亡靈」によつて連想される過去は、私園プライベートから森に分入るに従つて「時」を溯行し、古代の神秘的な「生命」に轉換される。第二稿第三章は、この後、既に述べた如くクリフォードによる「浮氣」の勧めに引繼がれ、冒頭の「亡靈」のモチーフは立消えるが、二人が森に赴き、コンスタンスがはじめて獵番に遭遇することになる同じ場面は、最終稿では第五章に現れる。二章分線下げられたのは、その間にマイクリスとの「交渉」が挿入された爲である。最終稿第五章冒頭の書き出しは次の如くである。

二月の太陽が小さく見える霧の朝、クリフォードとコニーは私園プライベートを通り抜けて森に出かけた。クリフォードは車椅子で、コニーはその傍を歩いて行つたといふことである。

きびしい大氣には依然として硫黄の臭ひがしたが、二人ともそれには慣れてゐた。真近に見える地平線のあたりには、霧と煙とで乳白色になつた霞がかかり、その上に小さな青空が載つてゐた。その爲になにか閉ぢこめられたやうな、いつも内部にゐるやうな氣がするのであつた。人生は常に圍みの中で見る夢、或は錯亂であつた。

私園の草叢にできた窪みに霧が浚んで、青味がかつて見えた。枯れた草地では羊が咳をした。私園を横切つて森の木戸に通じる小徑は、細いピンクのリボンに似てゐた。坑道から運んだ砂利を飾まじりかけ、クリフォードが小徑に敷かせたのである。地下の岩石や廢棄物は、燃えつきて硫黄を生じたあと、天氣の日には小海老の明るいピンク色に、雨に打たれば黒ずんだ蟹の甲羅の色に變るのであつた。⁽²⁹⁾

改稿の要點は明瞭であらう。邸内の閉塞された狀況が邸の外部にも延長されてゐること、炭礦主たるクリフォードの社會的特質が私園の小徑にまで反映され、「自然」の只中に人工の異質な風景が出現したことが強調される。私園は既に作者の意圖に組込まれてをり、その雰圍氣がコンスタンスに與へた得體の知れぬものの存在感については語られない。同様のことは森の描寫についても指摘しうる。

……森は未だ、野性の舊いイングランドの神秘を幾分かとどめてゐた。が、戦時中ジェフリー卿が木々を伐採したことは打撃であつた。にも拘らず、灰色の頑丈な幹を褐色の蕨の間から湧き上らせた樹々は、曲つた無數の枝を空に伸べて静まり返つてゐた。その枝の間を、鳥は何とのかに飛び交ふことか。かつてはここに鹿が棲み、狩人が居て、驢馬の背に乗つた修道僧が通つたのであつた。人はともかく、この土地はいまも記憶してゐるのであつた。⁽³⁰⁾

「幻」や「亡靈」の語は消え、「ドルイド僧」は「修道僧」に置き換へられる。表現は謂はば「常識的」になり、森の神秘性は過去の單なる追憶に席を譲る。この後第六章でコンスタンスが獨り森中なかを散策する折には、「古い森から古

代の憂愁がやつて来た」と書かれ、「静寂の力」^{ポテンシー}或は「貴族的な静寂」といふ語が用ゐられるが、それがどういふものであるかは明されない。つまり「森」は、それ自體に於ては讀者のイメージに固定された普通の「森」として描かれる。このことが、第二稿から最終稿に移る際に加へられる根本的な變更である。

ここで興味深いことは、「森」の神秘性を稀薄化させる同じ過程が、逆に、森に住む獵番を神秘化する過程でもあるといふことである。コンスタンスとクリフォードが話してゐるとき、不意に獵番が現れるわけであるが、その場面は第二稿と最終稿では各々次のやうに記される。

……二人の坐つてゐる場所の眞下の、交叉した乗馬道から、茶色のスバニエル犬が現れた。それはあたかも、二人の感情を遠くから嗅ぎつけ追ひつめてきたやうに、興奮して壓し殺したやうな小さな吠聲をあげた。

「おいで、さあ」コニーはクリフォードから手を離し犬の方に差し伸べた。ゆつくりと尾を振りながらも、犬は近寄らうとはしなかつた。

脇の乗馬道から、灰色がかつたコールテンの服を着た獵番がやつて来た。獵番は二人の闖入者を見、古びた茶の帽子に手をやつて挨拶したあと、小さな聲で犬を呼びながら、避けるやうに、岡を下つて行つた。彼は大腿で歩き續けた。

「バーキン！」とクリフォードが言つた。

男は立止つて、あたかも攻撃を豫期してゐたかのやうに突然振返つた。赭ら顔と訝むやうな眼が見えた。

「何でせう？」

「椅子を回して、勢ひをつけて呉れないか。さうして呉れると樂なんだ」

バーキンは銃を肩にかけ、小さきみな素速い動きで、大股で斜面をのぼつて來た。中肉中背の男であつた。日焼けした顔は朱に近く、褐色の突き出たやうな口髭を生やしてゐた。彼の舉措には、角張つた、人を寄せつけない軍隊式の動きがあり、それが板についてもゐたが、同時に物靜かでははらかく、殆どひそやかな、避けるやうなところさへあつた。⁽³¹⁾

コニーは、横道から走り出て來た茶色のスパニエル犬を見つめてゐた。犬は彼等の方に鼻を擧げ、かすかな、毛のやうに柔らかい吠聲をたててゐた。銃を持つた男が、素速く、輕妙に、犬を追つて、あたかも二人を襲はうとするかのやうに面前に現れた。が、彼は立上つて、挨拶をすると、方向を轉じて岡を下りはじめた。それはただの、新しく雇つた獵番にすぎなかつたが、コニーは男に吃驚した。男は素速く、脅かすやうに出現したと思へたからである。實際コニーにはさういふ風に見えた。それはどこからともなく忽然と走り出した脅威であつた。

男は濃い緑のベルベットの服に、ゲートルを卷いた舊式の服裝をし、赭ら顔に赤髭を蓄へ、遠くを見つめる眼をしてゐた。

「メラーズ！」とクリフォードが叫んだ。男は輕やかに振向くと、素速い無駄のない動作で挨拶をした。兵士のやうに！

「椅子を回して、エンジンをかけて呉れないか。さうして呉れると樂なんだ」とクリフォードは言つた。

男はすぐさま銃を肩にかけ、先程と同じ、素速いが然しやさしい不思議な動作で、あたかも姿を隠し通さうとするかのやうに近づいて來た。瘦せた中背のその男は物靜かであつた。コニーの方は見ずに、ただ車椅子だけ

を見てゐた⁽³²⁾。

最終原稿の獵番は、謂はは人の實體を持たぬ神秘的な力として暗示されてゐる。彼は nowhere から現れ、“a swift menace” の如く「ニヒを襲ふ。“the same curious swift yet soft movements” といふ不可思議な語の配列と “as if keeping invisible” なる謎めいた表現からも、メラーズに人並み外れた屬性が與へられてゐることが感得される⁽³³⁾。彼は當然にも “distant eyes” の持主であるが、第二稿のパーキンは、格別超人的な野性を感じさせない。クリフォードに呼ばれて “Sir?” と返答し、不意の攻撃に對して身構へ、身を避けることに意を用ゐる小心な人間の印象を與へる。最終稿のメラーズは逆に、どこからともなく現れて二人を襲ふのであるから、兩者の關係は完全に倒立されてゐる。メラーズのメラーズたる所以は、彼が人間を超えた秩序に歸屬する或る神秘的な Potency の象徴たることに存するのである。

獵番についてのこの改稿の變化と、森の神秘に關する第二稿と最終稿の全く逆の變化を考へるとき、作者の方針にどのやうな質的な變更が生じたかが理解できる筈である。即ち作者は、第二草稿の「森」の神秘を、最終稿では「メラーズ」といふ人間の中に移し入れたのである。逆に言へば、メラーズの體現するものは森の屬性であつてメラーズ自身のそれではない。『チャタレー夫人の戀人』全體の改作過程を見れば、(尤もその初稿は作者の構想の素案を文字にした程度のものであるが) 平々凡々たる獵番が本來の特質を失ひ、隠者、或は聖人の如き高貴さと、神秘的雰圍氣と、超人的な野性味を身にまとふ様が如實に見てとれる。何故そのやうな變化が必要であつたかは、最終稿では既に假構の中に隠されて判別し難い。他方第二稿は、「現實」の殘滓を過剰なまでにとどめてゐるから、創作にまつは

る作者自身の苦惱ぶりをも窺はせて呉れる。

例へば第二稿では、トミー・デュークスは次のやうな言葉を口にする。

……私にとつて、その身を切るやうな眞實とは肉體の復活のことだ、それが私の渴望するものなのだ。もし一つの完璧な知識、永遠の光があるとすれば、究極的に私には一つの肉體といふものがある。即ち、人と動物と大地の肉體だ。そしてもしこの肉體が新しさを持ち得るとすれば、それが私にとつての復活なのだ。⁽³⁴⁾ (傍點引用者)

この言葉が、執筆當時のローレンスの關心の所在を直接に語る言葉であることは、『死んだ男』に照して考へても、その語調の眞摯なる點を考慮しても容易に了解される。第二稿のトミー・デュークスは、最終稿で「君は何かを信じてゐるのだらう？」と云ふクリフォードの問に對し、「私？ あゝ頭の中では、善良な心と素適なベニスと貴婦人の前で *shit* と言へる勇氣を持つことが肝腎と思つてゐるさ」と語るトミー・デュークスとは異質の人物である。つまり『チャタレー夫人の戀人』が構想されたとき、ローレンスの念頭には第二稿のトミー・デュークスが述べた信念があつたと推測できるのである。その信念とは、人と大地と動物の生命が同一の肉體に宿ると見做すアニミズム的な宗教性に裏打ちされた信念であり、それを表出するためには、無論「四文字語」は不必要であつた。或は更に言へば、獵番でさへ差當つては必須不可缺のものではなかつたのである。第二稿のコンスタンスは、ボルトン夫人に森の散策を勧められ森に足を踏入れるとき次の如く感じる。

水仙？ 水仙が咲いてゐるのだらうか？ 獵番小屋の後ろに……？ コニーの心には、不思議な小さな烙印が

擦されてゐた。長い間彼女は、獵番のことを考へたことさへもなかつた。今もまた彼のことは考へなかつた。彼女の心に残つてゐるのは、暗い、寂しい冬の午後の小屋、暗い小屋の像イメージであつた。

しかし彼女は出掛けた。身體はまだ弱つてゐたけれど、力が出てきたやうに、しつかりと歩けるやうな氣がした。世界は生きてゐるのだ！人と動物と大地の内體！——全てそれらは再び生き返ることができるのだ。トミー・デュークスはさう言つた。それは眞實であつた。もし人間の内にある「精神」が妨害することがなければ。「汝は勝てり、あゝ蒼白きガリヤ人よ！——」。しかし復活は遂げられようとしてゐるのだ、大地と動物と人間の復活が。⁽³⁶⁾(傍點引用者)

獵番の存在は、作者の脳裏には前提されてゐるものの、獵番がコンスタンスと共に「人」の復活を遂げ得るか否かは未だ不確定である。ただ、「大地と動物と人間」が復活しなければならぬことだけは、(或はそれが可能であることとは)作者には自明な出發點である。首尾よくその課題が小説の中で果されるとき、作者は振返つて自己の信念の正しさを確認することが出来る筈である。しかし第二稿は、謂はば各々の登場人物に行動と思考の自由を與へたが爲に失敗に終つた。ローレンスにとつて、現實に存在する人間は救ひ難ひまでに「自然な」生命の屬性を喪ひ、現代といふ時代によつて畸型にされてゐたから、作者が現に存在する人間に忠實であらうとすればする程、作者の描かうとする人間關係は作者の人間に對する不信感の爲にいびつなものとなつたからである。

第二稿第七章冒頭で、既に獵番小屋に足を踏入れたことのあるコンスタンスは、「獵番の言葉は、遠回しに不倫の關係を仄かしたもののだらうか？ 確かにその可能性を半ば示唆したのだ。だとすると彼は、始終そのことを考へてゐたのだ！」と、「性」に對する警戒の念をゆるめようとしない。同様にパーキンは、凡そ人間關係自體に信頼を

置かぬのである。

パーキンは當惑して、無言のまゝ、仕事を續けた。彼の本能は、コンスタンスが彼に近づくために來たのだ、際限なく彼女は自分に近づくであらう、と教へた。パーキンはと言へば、誰であらうと自分に接近してほしくはなかつた。生きてゐる限り、二度と近づいて欲しくなかつた。今迄の人生で、他人と一緒にゐて自由な寛いだ氣持になつたことがなかつた。戦争が事態を一層悪くした。爾後は以前にもまして、人と接觸することを忌避した。彼の妻は、彼にとつて最悪であつた。何故か彼は間違ひを犯し、自分自身を卑めて了つた。彼は辱めを受け、彼にとつての人生で唯一の眞の充實はいま、獨りでゐること、常に獨りでゐることのみとなつてゐた。⁽³⁷⁾

無論この文章には誇張があると言はねばならない。人が自己の人生を振返るときに、勢ひ一色の色で過去の日々を塗りつぶして了ひ勝ちであるといふ意味での偏りがある。が、パーキンのこの日常は、『チャタレー夫人の戀人』執筆當時のローレンスの精神の基底音をあらはしてゐる。更に言へば、引用文中で「戦争が事態を一層悪くした」と言及された第一次大戦の長い暗黒の期間が、ローレンスを根本から變へた後は、この作家の精神を蝕んだ人を厭ふ氣持は遂に改まることになつた。本稿でその間の事情に觸れる餘裕はないが、さういふ孤獨な在り様しか持たぬ作者は、逆に、「自然界」の存在物との間に人間との關係にもまして親密な關係を有してゐた。そのことは、『鳥、獸、花々』(Birds, Beasts and Flowers)を繙く者には疑念の餘地ないことであるが、晩年に及んで、ローレンスと自然との關係はさらに根源的な關係に推移していつた。この關係を作品に形象化して成功した例としては、一九二五年に書かれた「太陽」(“Sun”)を挙げることができる。

ジュリエットは横はつた。薔薇色の焰が臉に沁みて耐へがたかつた。手を伸し、木の葉を取つて眼の上に置いた。再び横になつた彼女の軀は、熟れて金色に變る、陽を浴びた長い白い瓢箪に似てゐた。

ジュリエットには、陽が骨にまで浸透するのが感じられた。さらに深く、彼女の感情と思ひの内奥にまでそれは浸み透つた。感情の暗い緊張がほぐれ、思考の冷い暗い塊が溶けはじめた。體中に暖かさが感じられた。彼女は寝返りを打つて、腰と太股の後ろと、そして踵までも、陽光の中で溶けるにまかせた。自分の身に起りつゝあることに對する驚異の念に、半ば意識を喪つて彼女は横はつてゐた。疲弊し、冷却しきつた心は溶け、溶けるに従つて氣化していつた。⁽³⁸⁾

ジュリエットと太陽によつて表された關係が、『チャタレー夫人の戀人』執筆當時の作者にとつても、最も日常的で現實性のある關係であつた。ジュリエットがコンスタンス・チャタレーの原型であることは言ふまでもないことである。彼女の充足は、彼女が人間との關係に於ては孤獨で、しかし太陽との間に謂はば「性的」な結びつきを有しつゝ、現實の男とは交らぬことに存する。この太陽がやがて、作者の願望の世界で人の肉身をまとも可能性は、他の箇所では「太陽」が殆ど何の躊躇もなく、⁽³⁹⁾ "he" で言ひ替へられることによつても知られる。が、『太陽』の中ではローレンスは太陽を人格化することを斷念した。ジュリエットの身邊に近在の農夫を出没させておきながら、小説の結末部では、彼女と夫との間に性的な關係が繰返されることを示唆する。そのためこの小説は、讀者の「期待」を裏切り anticlimax の感を與へて終るのであるが、おそらく作者には、それが最も自然で虚偽のない結末であつたと思はれる。つまり孤獨は、(それが同時に「自然」との間の充足した關係である以上) 偽りの「性」的關係によつて穢され

てはならなかつたのである。にも拘らず、『チャタレー夫人の戀人』に於て作者は平靜な心の常態を逸脱し、謂はば無謀な冒険を試みたのである。それが無謀であつたことは、當の作品が一應の完成を見る迄に三度書き改められねばならなかつた事實が結果的に物語つてゐる。初稿、第二稿では、作者のヴィジョンが形を成すための道筋がいかがやうにも見出せない。ローレンスのヴィジョンは、人と自然との間に生じたヴィジョンに他ならなかつたから、人と人との關係に移し入れるときには、實在の諸人物と具體の世界の記憶が悪鬼の如く立現れてその試みを阻まうとするからである。コンスタンスと獵番の未來を語る作者は、知らぬ間に兩者の關係の中に人間に對する不信感が混入するのを感じる。殘された道は、従つて、コンスタンスを現代の全ゆる醜惡さによつて虐げ、神聖なる森に追込んだ後で、彼女とメラーズから人の屬性を剥ぎ取ることにしかない。かくしてメラーズは「森」の生命の化身となり、コンスタンスは、自己の絶望と不信の矛先をメラーズに對してだけは向けることのない従順な女性となつたのである。

『チャタレー夫人の戀人』第十二章までの成果と、それ以降の破綻とは、それ故に同一の原因から生じたものである。すなはち獵番のメラーズに「神秘性」を注ぎ込むことは、彼が獵番であるといふ事實のために、本來的な限界をもつと云ふことである。小説は、短編ノヴェル小説とは異なる質と長さを具へねばならないから、作者は作中人物と共に小説の中で生きざるを得ない。が、トミー・デュークスさへカリカチュア戯畫として描き去つたあとで、作者の思想と神秘的な體驗を獵番一人に代表させることは、もとより餘りにも過大な要請である。作者は専ら小説を收拾させることにのみ意を用ゐた観があるが、コンスタンスが妊娠したあと、森を去らねばならぬメラーズの未來はカナダの農場で働くといふ程度の水準でしか構想されない。これは、同じ作者が二十代半ばに書いた短編小説「牧師館の娘」(“Daughters of the Vicar”)の結末に酷似してゐるが、言ふまでもなく、二十六歳のローレンスにとつての眞實が四十代の彼の眞實であ

る筈もなかつた。已むなく作者は、コニーに宛て、純潔を讀へる「美しい」手紙をメラーズに認めさせること^{した}で同書を終へる。このとき『チャタレー夫人の戀人』は、一つの神話から一編の夢物語に變るやうに思へる。「神話」は、現實のもつ牽引力を振拂ふ力によつて却つて或るリアリティを生み出すが、夢物語は「現實」に足を掬^すはれた作者の感傷的な願望の表現でしかないからである。メラーズの手紙は、メラーズによつてではなく、『チャタレー夫人の戀人』の作者によつて書かれた手紙であることが、餘りにも明瞭に露見して了ふのである。

他ならぬローレンス自身が同書の構成と登場人物のもつ缺陷に氣づいたことは、『死んだ男』の後半部が『チャタレー夫人の戀人』の校正を終へた直後に書かれてゐる事實によつて推測できる。『死んだ男』第二部は、

風は内陸から、レバノンの見えざる雪^{イヴアイジアン}から烈しく冷やかに吹いて來た。しかし寺院は、エジプトの方角、南西の輝ける冬の太陽に向き、男が海の方向に折れる道を下つた頃には、燦然たる陽の暖かさが、彩色された木の柱の間に横溢してゐるのであつた。⁽³⁹⁾

といふ文章で始る。既に、第二部全體の雰圍氣はここに凝縮されてゐる、と云ふべきであらう。第一部を支配した緊張感^{張感}は、この場面で、寺院にあふれる「陽の暖かさ」によつてほぐれる。「見えざる雪」に象徴される崇高な寂けさを湛へた世界に、異質の秩序が導入され、作中人物は「現實」を超えたこの秩序の規範の命ずるまゝに生きる。甦つたキリストは、女神アイシスに仕へる女官との間に肉の交りを持つことによつて十全の意味に於る復活を遂げる。女は、「死んだ男」を男神オサイアリスと思ひ込み、待望した男神の出現に恍惚として、「脇腹を貫いた死の傷」を塗油

の儀式によつて癒しつゝ男と交る。その場面で、「性」の歡喜と「復活」の成就是「死んだ男」の「傷」の徐々に癒されてゆく過程と重ね合はされて敍べられる。これらの配慮によつて、『死んだ男』はほぼ最高の水準に達した象徴的文學表現を獲得するのである。つまりローレンスは、この小説では『チャタレー夫人の戀人』の缺陷を全て補つてゐるのであり、女官が妊娠した後、「死んだ男」にローマ人の監督による追捕の手が向けられ、恰も當初から豫期してゐたかの如く彼が女官の許もとを去ることに何ら不自然さを感じられない。「李すいの花が散り、水仙の時期が過ぎ、アネモネが地面を輝かせて去り、豆島の芳香が漂ふやうになつた」頃、天然の世界が移るに従つて、男と女官との結びつきも同様に移ろふといふ風に書かれてゐるからである。即ちここには、人事を超越した或る「攝理」が形象化されてゐる。「死んだ男」は當然にも、「太陽はその季節ともなれば廻つてくる」と言ふ。「私たちの間にあるものは善よきものであり、いまはもうそれは堅固なものなのだ。安心するがいい。ナイチンゲールが再び谷底から呼聲をあげるとき、私はきつと春のやうに戻つて来る」と靜かに語るのである。

「死んだ男」の言葉に窺へる信念は、——すなはち「性」が「宇宙」の循環に包攝されるものであるとの信念は——ローレンスの思想の最も本質的な部分を形づくるものである。そしてこの信念に生きた形態を與へることこそ、『チャタレー夫人の戀人』に於てローレンスが課題として掲げながらも果し得なかつたことなのである。既に引いた、雉の雛が「宇宙」に首を突き出す印象的な場面や、十二章のクライマックス等を除けば、作者は同書では人間の肉體をそのものとして讚美しすぎた嫌ひがある。それが不可避であつた理由は、既述した小説技法上の問題と、現實の作者の在り様さまに歸せられるが、「性」が「宇宙」との繋りから切離されるに随ひ、作者の關心は「性」に係る事實を白日の下に曝すといふ非本質的な次元に滑り落ちていつた。しかしローレンスは、自己の誤ちを本能的に察知し、意識化

せぬままにこれを修正する特異な才能の持主であつたから、この小説の第十二章までの部分に「神話」としての形を與へることによつて『チャタレー夫人の戀人』の藝術性を確保しようとしたのである。ローレンスのこの本能的な修正是、『チャタレー夫人の戀人について』にも認められる。

このエセイの中で、「性」にまつはる誤つた觀念を除去し、偏見なく「性」を見る必要があると述べた部分は、既に見たやうに冷靜な散文で書かれてゐる。これに對し、「性」が「宇宙」の運行との關連で語られる箇所は、逆に際立つて詩的に、創作の筆致を得て記されてゐる。その原因もおそらく、作者が小説の世界で果し得なかつたことを、事後的にエセイの中で補はうとしたところにあると筆者は考へるのである。即ち「性」は、人の生理學上の器官や人と人との生理的な關係に現れるものではなく、「自然」である限りの「人間」が互ひの存在の内の「自然」に結びつくといふ意味で、人を超越した生命をもつ「宇宙」の現象であるといふ信念の形象化がそれである。ローレンスにとつては、何が「猥褻」であるかとの間は自明に過ぎて答へやうのない問であつた。同様に、晩年のローレンスが繰返して主張した「優しさラディカスによる人の相互關係」といふ命題も、他人に向つて説き明かさうと試みるとときには、自づから變質して了ふ性質のものであつた。人の内なる「自然」を損ふものは、それが何であれ悉くローレンスには「猥褻」であつた。初夏の新緑の柔い生命テグダイが人の心に甦へるとき、その微妙な、脆い感情の移ろひを指して彼は「優しさ」と呼んだ。往々にしてローレンス自身その定義を逸脱することがあつたとしても、それは彼が、讀者の意識状態を付度し過ぎた結果として生じた事態である。ローレンスが生涯を通じて溫め續けた信念は、現代人の常識にとつては異質な、異様なものであつたが爲に、彼の人生を現代社會と現代人との闘争といふ「悲劇」の場にもち込まざるを得なかつた。「悲劇」である所以は、生前のローレンスに勝利の齎される道理はなかつたからであり、最初から勝敗の歸する處の自明な闘ひによつて彼が自らを貶めた後に、後の人々は素知らぬ顔で彼を「評價」し始めたからである。「私は出来るだ

け大きな流れに逆らはないやうにしてゐる。もう自分の道を通すといふことに傾著⁽⁴¹⁾しない。「絶対にさうしななければならぬといふのでなければ、何故俗物^{クライン}どもの爲に本を書く必要がありませう」と記した同じローレンスが、發禁を前提とし、私家版として出版した『チャタレー夫人の戀人』はおそらく著者にとつても失敗作であつた。だからこそ當該エセイの問題の箇所⁽⁴²⁾で、ローレンスは再度熱つばい調子で次のやうに書かなければならなかつたのである。

性は、宇宙に於る男性と女性の均衡である。牽引と反撥、中間的な移行の期間、常に以前とは異なる、新しい、常に新しい牽引と反撥のことである。長い無性の、血の沈んだ四句節^{レソント}と、復活祭の口づけの歡び、春の性の宴と眞夏の情熱、緩慢なる後退と反抗と秋の嘆きと、再度の灰色の日々、その後を訪れる冬と長い夜の嚴^{きま}しい刺激のことである。性は男女のなかで、一年のリズムを、即ち太陽と地球の繋りのリズムを経て、絶え間なく移り變る。太陽と地球の合一から、一年のリズムから、人がわが身を切り離したことは何といふ慘劇であらう！ 昇り、また沈む太陽から離され、夏至と冬至の魔術的な繋りから切り離され、愛が個人的な、單に個人的な感情に貶められるとき、愛は麻痺に見舞れ、何たる慘劇に遭^あふことであらう！ 我々にとつての問題はここに存する。我々の根はいま血を流してゐる。といふのも我々は、太陽と地球と星辰から切り離され、愛を痛ましい紛ひ物に變へて了つたからである。隣れにも一輪の花を、「生」の大樹から挽^もぎとつて、我等が文明の卓上の花瓶で、花咲かせ続けようと考へてゐるからなのである。⁽⁴³⁾

註

(一) F. R. Leavis, D. H. Lawrence: *Novelist*, Chatto and Windus, 1967, p. 293-294.

- (2) D. H. Lawrence, *Apropos of Lady Chatterley's Lover*, Mandrake Press, 1930, p. 22.
- (3) *ibid.*, p. 10.
- (4) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, Heinemann, 1960, p. 48-49.
- (5) *ibid.*, p. 51.
- (6) *ibid.*, p. 59.
- (7) *ibid.*, p. 66.
- (8) *ibid.*, p. 81-82.
- (9) *ibid.*, p. 102.
- (10) *ibid.*, p. 121.
- (11) *ibid.*, p. 129.
- (12) *ibid.*, p. 117.
- (13) *ibid.*, p. 107.
- (14) *ibid.*, p. 132.
- (15) *ibid.*, p. 48.
- (16) *ibid.*, p. 141-142.
- (17) *ibid.*, p. 161-162.
- (18) *ibid.*, p. 163-164.
- (19) *ibid.*, p. 165-166.

(20) 例へば『チャタレー夫人の戀人』第十一章で、コンスタンスが、「あゝ神よ、人間は人間に對して何といふことをしたのでせう。指導者達は同胞に對し何をし續けてきたのでせう。彼等は人間を人間以下のものにしてつた。今ではもう同胞の愛などはあり得ない。これは本當に悪夢なのだ。」と思ふとき、現代人がもはや「人間」とは呼べぬ何ものかに戀質してつた

つたのだと云ふ作者の認識の一端を窺ふことができる。

- (21) 因みに、現在出版されてゐる伊藤整譯『チャタレー夫人の戀人』は、ローレンス自身が字句を修正し表現を改めた *the Authorized British Edition* を底本とし、その中から昭和三十一年の最終判決で「猥褻」とされたオデューッセイ・プレス無削除版譯の該當部分を削除してゐるために二重の修正が施されてゐる。無削除版第十章はオーソライズド・エディションでは第十章、第十一章の二章に分けられてゐるので、ここで言ふ第十二章は伊藤整譯第十三章に相當する。
- (22) *Lady Chatterley's Lover*, p. 225-226.
- (23) *ibid.*, p. 227.
- (24) *ibid.*, p. 229-230.
- (25) *ibid.*, p. 271.
- (26) *ibid.*, p. 272.
- (27) *ibid.*, p. 338.
- (28) D. H. Lawrence, *John Thomas and Lady Jane*, Penguin Books, 1973, p. 25-26.
- (29) *Lady Chatterley's Lover*, p. 85.
- (30) *ibid.*, p. 87.
- (31) *John Thomas and Lady Jane*, p. 34-35.
- (32) *Lady Chatterley's Lover*, p. 90-91.
- (33) メラーズの眼は *his curious far-seeing eyes* (p. 111) “those blue, all-seeing eyes” (p. 112) と書かれ、第十五章では、彼の軀は *like a ghost, an apparition* (p. 283) “like a ghost, an apparition” (p. 283) と記される。それ故に、彼女がメラーズに對して恐怖の念を抱へると *as if he were not quite human* (p. 283) と云ふ言葉が用ゐられる。
- (34) *John Thomas and Lady Jane*, p. 71.
- (35) *Lady Chatterley's Lover*, p. 84.

- (36) John Thomas and Lady Jane, p. 89.
- (37) *ibid.*, p. 93.
- (38) D. H. Lawrence, "Sun", *The Complete Short Stories*, vol. II, Heinemann, 1968, p. 530-531.
- (39) D. H. Lawrence, *The Man Who Died*, Martin Secker, 1931, p. 53.
- (40) この才能は、『The Flying Fish』に特に顕著に認められる。一九二五年一月に『翼ある蛇』を脱稿したローレンスは、メキシコでマラリアに罹り、重症の結核もこれに加はつて生命を危まれる状態に陥る。この回復期に、彼は冒頭九頁分をフリーダに口述筆記させつゝこの短編小説を書き始めたのであるが、未完のこの小説で、ローレンスは既に『翼ある蛇』が失敗に終つた原因に氣づき、『チャタレー夫人の戀人』に至る道を小説の形で模索してゐる。これは、ローレンスが當時の書簡の中で『翼ある蛇』を指し「今迄書いた小説の内で最高の作」と述べてゐるのと異なる、意識化されない本能的な領域に於る修正と考へられるものである。
- (41) D. H. Lawrence, *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, Heinemann, 1962, p. 878.
- (42) *ibid.*, p. 923.
- (43) *Aprapos of Lady Chatterley's Lover*, p. 40.

(昭和五六年五月六日 受理)